

## 近代黎明期の通信

——日本語「電信」「電話」の変遷をめぐって

はじめに

西洋科学技術の受容とその発展によって、日本の「近代化」が進んだと言われているが、「電信」「電話」という新しい通信方式が導入された近代以降、私たちの文化生活が飛躍的に発展したことは言うまでもない。

明治の啓蒙家福沢諭吉は、歴史を動かすものは時勢であり、時勢を動かすものは交通の便であると説いた。十九世紀文明の急速なる発展は蒸氣船車、電信、郵便、印刷の発明工夫に基づくものであり、この工夫が民情に影響を及ぼし、新しい技術の発明が歴史を動かす原因になると言うのである。<sup>(1)</sup>

古來世に發明工夫甚だ勤なからず。天文、化學、器械學等、

何れも時代に隨て面目を改めたるは諸書に據て之を知る可し。

古は地動の説、元素の發明、火器の製造より、近代には種痘、瓦斯燈<sup>がすとう</sup>、紡績器械等、其最も著しきものにして功德も亦僅少ならずと雖ども、凡そ其實用の最も廣くして社會の全面に直接の影響を及ぼし人類肉體の禍福のみならず其内部の精神を動かして智徳の有様をも一變したるものは、蒸氣船車電信の發明と郵便印刷の工夫、是なり。

〔民情一新、明治十二年〕

近代の「通信」である「電信」「電話」は、当初、「伝信」「伝話」と表記されていた。これらのことは、いつ、どのような経緯で「伝信」から「電信」へ、「伝話」から「電話」へと置き換えられたのだろうか。その時代時代で使われて来たこれらのことばを通し

新井菜穂子

て、日本の「通信」の歴史を探ってみたいと思う。

## 一 電信

日本で電信機による通信が始まるのは、明治二年のことで、日本にもたらされた「電信機」としては、安政元年（二八五四）正月、二度目のペリー来航の際に幕府へ献上された電信機や、同年閏七月にオランダ献上の電信機が知られているが、安政元年一月十三日、箕作阮甫が長崎へ出張した際、出島和蘭商館で電信機を見たという記録が『西征紀行』<sup>(2)</sup>にあるので、それ以前にペリー来航の際のものは別の電信機が長崎に渡来していたことになる。また、「電信機」についての知識そのものはそれ以前からあり、日本人として最初に電信を見聞したのは中浜万次郎であろうと言われている。万次郎は、天保十二年（一八四二）十四歳の時、出漁中に遭難してアメリカ船に救われ、以後、嘉永四年（一八五二）に帰国するまで十一年間アメリカで教育を受けた。

石井研堂は、万次郎の電信機に関する口書について次のように記している。<sup>(3)</sup>

嘉永五年に米國より歸朝せる漂流萬次郎の口書に「路頭に高く張金を引これ有り、是に書狀を掛、驛より驛へおのづと達し飛脚を勞し申さず候、中にて行逢はぬ様往來の差別を仕り御座

候、此機私は存じ申さず候、鍍にて磁石を吸よせ候様に相考申候」とあり、電信發明間も無き事なれば、萬次郎も其智識なく、世人の噂などを其のまゝ述べしものと思はる。

〔改訂増補明治事物起原〕、昭和十九年

日本に電信機についての知識が伝えられた当初の記録として、川本幸民は、「傳信機」は「印點傳信機」と「鍼指傳信機」の二種類があり、鍼指傳信機について、磁氣と電氣に通ずれば恐れることはない<sup>(4)</sup>と説明している。

傳信機二種アリ一ヲ印點傳信機トイフ點數ヲ以テ記號ヲ定メ此ノ處ニテ示サムト欲スル所ノ點數ヲ打テバ彼處ノ紙上ニ其ノ數ノ印痕ヲ出ダス者ナリ一ヲ鍼指傳信機トイフ圓版ノ周邊ニ字ヲ列シ鍼ヲ以テ其字ヲ指示セシムル者ナリ饒千萬里ノ遠キモ河海ヲ阻ツルモノ銅線ノ達スル處ハ音信ヲ傳フル實ニ數瞬ヲ容レズ未タコレヲ見ザル者ハ怪ムベシト雖ヨク麻痺涅多ト越歴的爾ノ理ニ通曉セバ復驚クベキニアラズ鍼指傳信機ハ「ロゲマン氏ノ發明ニ出デテ一千八百四十六年<sup>我が弘化四年</sup>二世ニ公ニスベキ命ヲ蒙リタル者ニシテ其ノ理解シ易キガ故ニ今コ、ニ揭示ス

〔遠西奇器述〕、嘉永七年

「ハリガネダヨリ」とも呼ばれた「電信機」は、このように当初「傳信機」と表記されていた。「傳信」が「電信」に置き換わったのはいつ頃からであろうか。

「でんしん」ということばについてのこれまでの研究として、『明治のことば辞典』<sup>(5)</sup>には、「でんしん」は、「電信」のみ、「でんしんき」については、「伝信機」と「電信機」を別々に記述し、明治二年に電信事務を行った機関は「伝信機役所」であり、同年「伝信局」と改め、明治五年に「電信局」と改称されたことが、伝信から電信への原因であると説明している。

## (一) 辞書

『日本国語大辞典』<sup>(6)</sup>によれば、「でんしん」の説明は、以下のとおりである。

でんしん【電信・伝信】〔名〕○文字や符号、あるいは写真などを電氣的な符号に変えて隔たった場所で再現する通信。また、電信で送った文字や符号。電報。テレグラフ。○電流を送電線で送ること。㊦呼びりん。㊨盗人仲間の隠語。㊩通譯することをいう。㊪電柱を伝って忍び入ることをいう。

また、諸橋轍次の『大漢和辞典』<sup>(7)</sup>では、以下のとおりである。

【電信】電氣を利用し文字・記號・符號にて音信を通ずるもの。電信機による通信。有線電信と無線電信との別がある。

【傳信】○古事の眞實な者は其の儘之を傳へること。㊦漢代、其の身分の正確なことを保證する爲に携へた一尺五寸の木。傳瑞。

日本に電信機が伝えられた幕末明治以降の代表的な辞書にある“Telegraph”“Telegraph”“Telephone”及び「電報」「電信」「電話」についての表記をまとめると、表1及び表2の通りである。文久二年、堀達之助の『英和對訳袖珍辭書』では「使信機」とあったのが、明治六年、柴田・子安の『付音插図英和字彙』では「電信機」となっており、辞書にある表記からは、明治六年頃を境に「傳信」から「電信」への推移を窺い知ることができる。では、どういった経緯で「傳信」から「電信」へ変わって行っただのか、用例を調査し、順を追ってその推移の過程を詳しくたどってみたいと思う。

表1-1 幕末明治以後の対訳辞書(英和・英華)

	Telegram	Telegraph	Telephone
英和対訳袖珍辞書 堀達之助 文久2年(1862)	(なし)	俵信機	(なし)
和英語林集成 初版 平文 慶応3年(1867)	(なし)	(なし)	(なし)
英華字彙 ス維爾士維廉士 明治2年(1869)	(なし)	(なし)	(なし)
改正増補和訳英辞書(薩摩辞書(初版本)) 日本薩摩學生 明治2年(1869)	(なし)	デンシンキ 傳信機	(なし)
和英語林集成 再版 平文 明治5年(1872)	<i>n. Denshin.</i>	<i>n. Denshinki. -office, denshinkyoku. -line, senro.</i>	(なし)
附音挿図英和字彙 柴田昌吉・子安峻 明治6年(1873)	電信	電信機	(なし)
英華和譯字典 W. ロプシャイト原著、中村敬字等校正 明治12年(1879)	(なし)	<i>n. 報、傳報、デン(傳)シンキ、den-shin-ki; a wire telegraph, 線報、デン セン パウ(線ヲ以テ信ヲ傳フル機)、den-sen-po; electro-telegraph, 電報、デン(電)シン、den-shin. v.t. 傳報、デンシンキヲモツテ タヨリヲ ツタフ、den-shinki wo motte tayori wo tsutō.</i>	(Telephonic, <i>a. far-sounding, 遠聲的、オホク ヒビク、ōku hibiku.</i> )
増訂英華字典 羅布存徳原著、井上哲次郎訂増 明治17年(1884)	(なし)	<i>n. 報、傳報 v.t. 傳報</i>	(Telephonic, <i>a. Far-sounding, 遠聲的</i> )
附音圖解英和字彙 第2版 柴田昌吉・子安峻 明治18年翻刻(1885)	デンシン 電信	<i>n. 電信機 v.t. 電報スル、電信機ニテ報スル</i>	(なし)
和英語林集成 第3版 平文 明治19年(1886)	<i>n. Denshin, dempō.</i>	<i>n. Denshinki. -office, denshinkyoku. -line, densen.</i>	(なし)
英和雙解字典 再版 棚橋一郎譯 明治19年(1886)	デンシン デンパウ 電信。電報	デンシンキ 電信機	(なし)



ウェブスター氏新刊大辭書和譯字彙 イーストレーキ、棚橋一郎共譯 明治21年 (1888)	<i>n.</i> 電信、電報	<i>n.</i> 電信機	<i>n.</i> 傳話機 (Telephonie, <i>a.</i> 遠方ニ聲ヲ達スル、傳話機ノ)
附音挿図和譯英字彙 島田豊纂譯 明治21年 (1888)	<i>n.</i> 電信、電報	<i>n.</i> 電信機	<i>n.</i> 傳話機 (Telephonie, <i>a.</i> 遠方ニ聲ヲ達スル、傳話機ノ)
明治英和字典 尺振八譯 明治22年 (1889)	電信。電報。	電信機○信號器。	傳話機。
電氣譯語集 伊藤潔識 明治26年 (1893)	電報	(Acoustic telegraph 音響電信機 Automatic telegraph 自働電信機 Electric telegraph 電信、電信機 [など])	電話機
工学字彙 第3版 工學協會 明治27年 (1894)	電報	電信機	電話器
新增英華字典 W. ロプシャイト原著、F. キングセル増訂 明治32年 (1899)	(なし)	<i>n.</i> 報、傳報 <i>v.t.</i> 傳報	(Telephonic, <i>a.</i> Far-sounding, 遠聲的)
英獨和獨英和插圖電氣工學辭典 兒玉隼植ほか 大正2年 (1913)	電信、電報	電信	電話
英和工學辭典 増補改訂第8版 中島銳治ほか 大正5年 (1916)	電報	傳信機、電信機	電話
袖珍英和新辭典 森卷吉、山口造酒編 大正6年 (1917)	電信、電報	電信機	電話器
模範新英和大辭典 22版 神田乃武[ほか]編 大正10年 (1921)	電信 (電報)、電報 (電報) Code telegram. 暗號 (電報) 電報	○電信機、通信器 ○電信、電信法	電話 (電報) 器、電話
第三回増補電氣工學術語集 日本電氣工藝委員會 大正14年 (1925)	電報	電信；電信機	電話；電話機
英和工學辭典 増補16版 中島銳治 [ほか] 著 大正14年 (1925)	電報	傳信機、電信機	電話
外來語辭典 第7版 あらかは そうべゑ 昭和17年 (1942)	(なし)	はりがねだより。傳信機。電信機。=テリグラフ。	電話
外來語辞典 楳垣実 昭和41年 (1966)	電報	伝信機。電信機。	(テレフォンガール 電話交換嬢)

外来語辞典 荒川惣兵衛 昭和42年 (1967)	電報	(遠くで書くものの義) 電信機。電報。(往時)'はりがねだより'などとも訳した) = テリガラフ	(遠くの音の義) 電話。略してテレという。
外来語辞典 第2版 あらかわそおべえ 昭和61年 (1986)	電報	(遠くで書くものの義) 電信機。電報。(往時)'はりがねだより'などとも訳した) = テリガラフ	(遠くの音の義) 電話。略してテレという。

表1-2 幕末明治以後の対訳辞書(和英・華英)

	デンパウ	デンシン	デンワ
和英語林集成 初版 平文 慶応3年 (1867)	(なし)	(なし)	(なし)
和英語林集成 再版 平文 明治5年 (1872)	(なし)	DEN-SHIN-KI, デンシンキ、傳信機 <i>n.</i> The telegraph.	(なし)
和英語林集成 第3版 平文 明治19年 (1886)	DEMPŌ デンパウ 電報 <i>n.</i> A telegram. Syn, DEN-SHIN.	DENSHIN デンシン 傳信 <i>n.</i> Telegram: <i>-kyoku</i> , telegraph office. DENSINKI デンシンキ 傳信機 <i>n.</i> The telegraph.	DENWAKI デンハキ 電話機 <i>n.</i> Telephone.
新譯和英辭典 17版 井上十吉編 大正3年 (1914)	Denpō (電報), <i>n.</i> A telegram. Wo utsu (-を打つ). To telegraph; send a telegram; wire.	Denshin (電信), <i>n.</i> Telegraph. -wo kakeru. To telegraph; wire.	Denwa (電話), <i>n.</i> A telephone; a 'phone (俗語); telephony (術). -wo kakeru (-を掛ける). To call another by telephone; ring up.
井上和英大辭典 18版 井上十吉 大正11年 (1922)	Denpō (電報 [電報]), <i>n.</i> a telegram; a wire; a cablegram; telegraph (新聞紙等の名稱に用ひて)	Denshin (電信), <i>n.</i> ① Telegraph; telegraphy. ② = <i>denpō</i> (電報).	Denwa (電話), <i>n.</i> a telephone; a 'phone [俗]

表2 明治以後の日本語辞書

	でんぼう	テレグラフ	でんしん	でんしんき	でんわ	でんわき
言海 大槻文彦 明治24年	でん <sup>ポ</sup> ぼう   電報   電信ニ同 ジ。	テレグラフ [英語Telegraph] 電信機ニ同ジ	でん・志ん   電信   電信機ニテ 通ジタル音信。電報。	でん・志ん・き   電信機   電氣ヲ用キテ千 万里ノ地ニ、音信ヲ瞬息ニ 通ズル機、銅線ヲ兩地ニ互 シ置キテ、機械ニテ電氣ヲ 發シテ相通ズ。	(なし)	でん・わ・き   電話機   電氣ノ機械ヲ用キ テ、遠處ノ人ト話ヲ相通ズル モノ。
日本大辞書 山田美妙 明治26年	でん・ぼう {電報} 字音。電 信。	てれがらふ [英語Tele- graph]。電信機。 今既ニ廢語トナル。 明治以後、暫時ノ 間ノ語。	でん・しん {電信} 字音。電信 機デ通ズル音信。＝ 電報。	でんしん・き {…機} 字音。電氣ニ由ツ テ、離レタ土地ニ一瞬間ニ 音信ヲ通ズル仕掛ケ。銅線 ヲ引ク。	でん・わ {(電話)} 字音。電氣 ヲ用キテ話シヲ通ズル コト。	でんわ・き {電話機} 字音。電話ノ機。
漢英対照いろは 辞典 高橋五郎 明治21年	でんぼう 電報、でんしんじ らせ A telegram	(なし)	でんしん 電信、はりがねだよ り、電報、電文 A telegram, tele- graphic dispatch or message.	(なし)	(なし)	でんわき 傳話機、はなしをおくるうつ は A phonograph.
和漢雅俗いろは 辞典 高橋五郎 明治22年	でんぼう 電報、でんしんじ らせ	(なし)	でんしん 電信、はりがねだよ り、えれきのたより、 電報、電文	(なし)	(なし)	でんわき 傳話機、はなしををくるうつ は
増訂二版和漢雅 俗いろは辞典 高橋五郎 明治26年	でんむう 電報、でんしんじ らせ	(なし)	でんしん 電信、はりがねだよ り、えれきのたより、 電報、電文	(なし)	でん <sup>ワ</sup> 電話 (電氣を使ひて遠 處に在て人と談話する 法)	でん <sup>ワ</sup> き 電話機 (電話を行ふ機械)、 はなしををくるうつは
日本大辞林 物集高見 明治27年	でんむう 電報。でんしん。 でんしんきの志ら せ。	(なし)	でんしん 電信。でんしんき <sup>ム</sup> てつさふるおとづれ。	でんしんき 電信機。えれきてるの <sup>モ</sup> さ らきをもちひて、おとづれ をかよ <sup>モ</sup> すもの。銅の線 を <sup>モ</sup> り <sup>ワ</sup> として、電氣を かよ <sup>モ</sup> すもの <sup>ム</sup> て、音信を かくれば <sup>マ</sup> さゝくあひ <sup>ム</sup> 、 千里の外 <sup>ム</sup> つさ <sup>モ</sup> り <sup>ム</sup> く。	(なし)	でん <sup>ワ</sup> き 傳話機：でんしんのたぐひな り。えれきてるの <sup>モ</sup> さらきを もちひて、とほく <sup>モ</sup> なれ <sup>ル</sup> さ るひとと、 <sup>モ</sup> なしのい <sup>デ</sup> くるや う <sup>ム</sup> し <sup>ル</sup> るもの。

帝国大辞典 藤井乙男・草野 清民 明治29年	でんぱう (電報) 電信なり。	てれがらふ 英語のTelegraph なり、電信機をい ふ、今既に廢語と なれり、明治以後、 暫時の間、行はれ し語なり。	でん・しん (電信) 電信機にて 通ずる音信をいふ。 即ち電報なり。	でんしん-き (電信機) 電氣に由りて離 れたる土地に一瞬間にして 音信を通ずる機なり、電氣 の銅線を傳ふに據れる器機 なり。	でん-わ (電話) 電氣器機に據 りて話を通ずるなり。	(なし)
ことばの泉 落合直文 明治32年	でん-ぱう 電報。電信機 <sup>ニ</sup> て 通ぜしむる音信。	(なし)	でん-志ん 電信。電信機 <sup>ニ</sup> より て通ずる音信。	でんしん-き 電信機。電氣の作用 <sup>ニ</sup> より て、銅線 <sup>ニ</sup> て、音信を通ず る機械。	でん-わ 電話。電話器械 <sup>ニ</sup> より て、遠方の人と、互 <sup>ニ</sup> 談話すること。	でんわ-き 電話機。遠隔せる地へ、針金 をひきれき、電氣の作用 <sup>ニ</sup> よ り、互 <sup>ニ</sup> 、談話を通ずる器械。
大言海 大槻文彦 昭和9年	でん-ぱう   電報   電信機ニ ヨル報知。でん志 ん (電信) ニ同ジ。	テレグラフ [ 英 語 Tele- graph ] でん志ん き (電信機) ニ同 ジ。	でん-志ん <sup>デンシンキ</sup>   電信   電信機ニテ、 通ジタル音信。電報。	でん志ん-き   電信機   電氣ヲ用キテ、 遠隔ノ地ニ、音信ヲ瞬息ニ 通ズル機、銅線ヲ兩地ニ互 シ置キテ、機械ニテ電氣ヲ 發シテ相通ズ。	でん-わ   電話   (一) [英語 Telephoneノ譯語] 電 話機ニヨリテ通ズル談 話。「無線電話」電話 交換 (二) 電話機ノ 略。	(なし)
新訂大言海 大槻文彦 昭和49年	でん-ぱう   電報   電信機ニ ヨル報知。でん志 ん (電信) ニ同ジ。	テレグラフ [ 英 語 Tele- graph ] でん志ん き (電信機) ニ同 ジ。	でん-志ん <sup>デンシンキ</sup>   電信   電信機ニテ、 通ジタル音信。電報。	でん志ん-き   電信機   電氣ヲ用キテ、 遠隔ノ地ニ、音信ヲ瞬息ニ 通ズル機、銅線ヲ兩地ニ互 シ置キテ、機械ニテ電氣ヲ 發シテ相通ズ。	でん-わ   電話   (一) [英語 Telephoneノ譯語] 電 話機ニヨリテ通ズル談 話。「無線電話」電話 交換 (二) 電話機ノ 略。	でん-わき   電話機   電流ヲリヨウシテ 遠所ノ人ト談話ヲ通ズル機械。 送話器ト、受話器ト、電池ト、 及、コレ等ヲ連絡スル導線ト ヨリ成ル。略シテ、電話。
新編大言海 大槻文彦 昭和61年	でん-ぱう   電報   電信機ニ ヨル報知。でんし ん (電信) ニ同ジ。	テレグラフ [ 英 語 Tele- graph ] でん志ん き (電信機) ニ同 ジ。	でん-しん <sup>デンシンキ</sup>   電信   電信機ニテ、 通ジタル音信。電報。	でんしん-き   電信機   電氣ヲ用キテ、 遠隔ノ地ニ、音信ヲ瞬息ニ 通ズル機、銅線ヲ兩地ニ互 シ置キテ、機械ニテ電氣ヲ 發シテ相通ズ。	でん-わ   電話   (一) [英語 Telephoneノ譯語] 電 話機ニヨリテ通ズル談 話。「無線電話」電話 交換 (二) 電話機ノ 略。	でん-わき   電話機   電流ヲリヨウシテ 遠所ノ人ト談話ヲ送ズル機械。 送話器ト、受話器ト、電池ト、 及、コレ等ヲ連絡スル導線ト ヨリ成ル。略シテ、電話。

(二) 新聞雑誌

ことばについての説明が辞書に記述されるのは、そのことばが市民権を得た後のことである。辞書よりもっと一般大衆向けの記録の方に新しいことばが早く現れるであろうから、時代の生きたことばを映し出している新聞雑誌から用例を拾ってみた。用例収集には、主に『新聞集成明治編年史』<sup>(8)</sup>を用いた。

大別して以下のとおり、「テレグラフ」「伝信」「電信」の三種類に分けられる。

・「テレグラフ」

テレグラフ……明治2 天理可楽怖、明治2 中外新聞、明治

3 もしほ草

天理可楽怖……明治2 天理可楽怖

・「伝信」

傳信機……文久2 バタヒヤ新聞、文久2 海外新聞一、

明治2 中外新聞、明治2 天理可楽怖、明治

4 新聞雑誌一

傳信機會社……文久2 海外新聞一

傳信會社……明治2 中外新聞

傳信機局……明治2 天理可楽怖

テレグラフ 伝信機……明治3 もしほ草

傳信線……明治4 新聞雑誌一

傳信杭……明治5 萬國新聞四

・「電信」

電信……明治4 新聞雑誌一一、明治5 東京日日新聞、

明治9 郵便報知新聞、明治13 朝野新聞、明

治19 東京日日新聞、明治20 高知日報、明治

22 時事新報、明治35 日本

電信頭……明治4 新聞雑誌一一

電信機……明治5 日要新聞三、明治5 京都新報 投書、

明治5 東京日日新聞、明治20 時事新報、明

治22 時事新報、明治23 時事新報、明治24

日本

テレグラフ 電機報信……明治5 新聞雑誌六一

テレグラフ ステンション 電信機繼立所……明治5 日要新聞三

電信線……明治5 新聞雑誌四一、明治5 新聞雑誌四四

電信局……明治5 京都新報 投書、明治14 東京日日新

聞、明治21 朝野新聞

電機……明治8 朝野新聞

電信機械……明治10 東京曙新聞

電信柱……………	明治 14	東京日日新聞
電信隊……………	明治 18	東京横濱毎日新聞
電信切手……………	明治 18	時事新報
電信条例……………	明治 19	東京日日新聞
電信暗號……………	明治 20	改進黨新聞
電信符號……………	明治 20	改進黨新聞
電信交換所……………	明治 22	時事新報
電信電話隊……………	明治 39	東朝

初期には、カタカナ表記の「テレグラフ」や「傳信機」が用いられ、続いて「電信機」が用いられるようになるという変遷を辿って来たことがわかる。

「傳信」に代わって「電信」が用いられるようになるのは、明治五年に電信局が電信局に変更になったことに由来すると説明する『明治のことば辞典』の説に反して、「電信」の用例は、明治四年八月『新聞雑誌一一』に現れている。明治四年八月十四日に、工部省に電信寮が置かれたことを報じる記事である。

工部省中諸寮司、左ノ通定メラレタリ。  
 一等寮 工學、勤工、鑛山、鐵道。  
 二等寮 土木、燈臺、造船、電信、製鐵、製作。

(中略)

任電信頭 石丸虎五郎

〔『新聞雑誌』第二一號、明治四年八月〕

### (三) 公文書

では、公文書においては、どのように記述されているのであろうか。慶応三年(一八六七)から明治十四年(一八八一)までの間のいわゆる太政官時代の公文書類を編集した「太政類典」<sup>9)</sup>を調べてみると予想に反して、「太政類典」の「運漕 陸運 鉄道 電信 郵便三」には、明治の初期の段階から「電信」の文字が散見する。例えば、明治三年六月十日「東京ヨリ長崎マテ電信架建ニ付建造方調査セシム附伝信線路并傳信局設置箇所等調査書」「民部省へ達」に、「電信機ノ儀追テハ全国諸道へ御建造可相成候」、また、同様に明治三年九月七日「民部省 大藏省へ達」に、「先般御決定ノ通横濱長崎ノ間陸路電信機速ニ可取建事」とある。(傍点 著者)

また、明治四年五月廿二日「東京横濱及大阪神戸間ノ電信自今公私ノ別ナク手数料受領」「工部省伺弁官宛」に「電信機ヲ以テ通信ノ節諸官省并地方官ニ於テハ」とある。明治三年六月廿三日「丁抹國公使海底電線ヲ内國へ陸揚センヲ乞フ」の中にも「傳信」の文字も多く混在するものの、「電信機ノ儀」「電信繼立ノ儀」などの表記が条項の中に散見する。(傍点 著者)

更に、外務省関連の公文書である「外務類纂」<sup>(10)</sup>にも早い時期から「電信」の例が見受けられる。例えば、明治元年（一八六八）「外務類纂 内地電信機関係書類」「第弐号 東京府判事ヨリ向山隼人瑞西国へ伝信機注文ノ顛末静岡藩取札別紙回送ノ来翰」「（附属）静岡藩への達書」「（附属）静岡藩よりの回答書」「（附属）静岡藩開成所奉行答書」及び「（附属）契約書」に「電信機」の文字が見える。また、明治三年（一八七〇）「第三号 瑞西代弁総領事へ旧藩ノ際注文ノ電信機械成功次第回送方依頼ノ回答往翰」「東京横浜間電信建設ニ関シ米公使トノ往来翰」にも「電信機」の文字が見える。以上の記録より、実際には、明治四年八月十四日の電信寮設置以前から、「電信」ということばが用いられていたことが明らかとなった。

#### （四）文学作品

明治の文学作品中に現れる「電信」「電信機」についても調査してみると、次のような例が見受けられた。用例収集には『明治文学全集』<sup>(11)</sup>を用いた。

テレグラフ……………明治元「菴菴十種 鉛筆紀聞」栗本鋤雲  
 テレグラフ……………明治19「日本文章論」末松謙澄  
 傳信器……………慶応2年以降「航魯紀行」森有禮

傳信機……………明治2「世界国盡」福澤諭吉  
 傳信機……………明治3「西洋道中膝栗毛」仮名垣魯文  
 傳信……………明治12「高橋阿傳夜刃譚」仮名垣魯文戯誌  
 音信贈答……………明治3「西洋道中膝栗毛」仮名垣魯文  
 てれがらふ網……………明治3「西洋道中膝栗毛」仮名垣魯文  
 電信……………明治3「西洋道中膝栗毛」仮名垣魯文  
 明治8「寄笑新聞」梅亭金鷲  
 電信……………明治11「通俗国權論」福澤諭吉  
 明治12「民情一新」福澤諭吉  
 明治15「人權新説」加藤弘之  
 明治19「日本道德論」西村茂樹  
 明治29「福翁百話」福澤諭吉  
 明治12「高橋阿傳夜刃譚」仮名垣魯文戯誌

電機……………明治12「高橋阿傳夜刃譚」仮名垣魯文戯誌

文学作品では、必ずしも新しい流行語ばかりが使われるわけではなく、ルビ付き漢字表記が多く見られ、ここではルビはカタカナではなくひらがなになっている。

#### 二 電話

「電話」が日本に輸入されたのは、明治十年であるが、その時点で「電信」は既に「電」の文字が使われていたにもかかわらず、「電

信」の場合と同様に「電話」もやはり初めは「伝話」が用いられた。なぜ初めから「電話」が用いられずに「伝話」が用いられたのだろうか。また、いつ、どのような経緯で「伝話」は「電話」に置き換えられたのだろうか。

「でんわ」についての既存研究は、『明治のことは辞典』には、「でんわ」の項目はあるものの、「伝話」の記述はなく、「電話」のみ、簡単な説明にとどまっている。「電話」という用語は日本で作られたことばであることについては既に『漢語外来词词典』<sup>(12)</sup>に記述があり、「電話」についての最近の研究として、日本語「電話」が中国語に取り入れられていく経緯についての論考は荒川清秀氏の論文<sup>(13)</sup>が詳しい。

## (一) 辞書

『日本国語大辞典』によれば、「でんわ」の説明は、以下のとおりである。

でんわ【電話】〔名〕(英 telephoneの訳語) ①(―する) 電話機で通話すること。また、その通話。②「でんわき(電話機)」の略。  
でんわ【伝話】〔名〕いい伝えること。話を伝えること。

『大漢和辞典』では、以下のとおりである。

【電話】電氣の作用によつて互いに談話すること。又、其の装置。電話機。

【傳話】いひ付ける。いひ傳へる。上からの命令を傳へる。

辞書にはじめて「電話」が現れるのは、表1に示すとおり、明治十九年『和英語林集成』(第三版)の「電話機」である。「電信」と同様に、当時の新聞雑誌等資料にあたつて調べてみることにしよう。

## (二) 新聞雑誌

電話に関する記述として、最も早い時期に見られるものには次のような記事がある。「傳話」「電話」という表現はまだなく、「話を伝えることのできる機械」であるという内容の記述に留まっている。

先日一寸出て置々新發明の電線ハ一昨日お試しガあり此器械ハ去年ちう米國ボストン府の學士ヘル氏の發明にて此程はじめに日本へ舶來しゝ器械にて口で先方へ咄しかけると先でハ耳をあてゝ話を聞き何でも滯ほりかく用ガ辨じて至極重寶ハ器械かれど是ハまゝお買上に極ツとわけでハ無いといふ。

(『讀賣新聞』、明治十年十二月二十三日)



また、「傳話」という表現を使いながらも、「話しに通ずる電信機」という説明を併記する例も見受けられる。

近ごろ米國に於て發明したる傳話線（話しに通ずる電信機）を、近々の内に内務省と警視局との間へ架設せらるゝ由、此の一線架渡し費は凡三百廿五圓ほどなりと聞けり。

（『朝野新聞』、明治十一年二月九日）

「電信」と同様に、新聞記事中の用例を拾ってみると以下のとおりである。大別して、「テレホン」「伝話」「電話」の三つのグループに分けられる。用例収集には、主に『新聞集成明治編年史』及び『讀賣新聞』CD-ROM版を用いた。<sup>14)</sup>

・「テレホン」

テレホン室……明治11 讀賣新聞  
テレホン……明治11 讀賣新聞、明治19 讀賣新聞

・「伝話」

傳話線（話しに通ずる電信機）……明治11 朝野新聞  
傳話機……明治11 朝野新聞、明治12 朝日新聞、明治13

朝野新聞、明治13 朝日新聞、明治14 東京日日新聞、明治14 朝野新聞、明治14 東京日日新聞、明治15 東京日日新聞、明治16 繪入朝野新聞、明治19 東京日日新聞  
傳話機……明治11 讀賣新聞、明治13 讀賣新聞、明治13 朝日新聞、明治14 讀賣新聞、明治15 讀賣新聞、明治17 讀賣新聞、明治18 讀賣新聞、明治19 讀賣新聞、明治20 讀賣新聞、明治21 讀賣新聞

テレホン  
傳話機……明治11 東京日日新聞

傳話電信……明治11 讀賣新聞

傳話電信……明治11 讀賣新聞

傳話電信機……明治11 讀賣新聞

傳話電信器……明治11 讀賣新聞

磁石電氣電信機テレホン（傳話機）……明治11 讀賣新聞

傳話器……明治12 讀賣新聞

傳話器……明治14 東京日日新聞、明治21 朝野新聞

傳話……明治17 讀賣新聞、明治21 讀賣新聞、明治29

讀賣新聞

高聲傳話機……明治18 朝野新聞  
高聲傳話機……明治18 讀賣新聞

電磁傳話機（エレクトロ、<sup>ママ</sup>アクネチ<sup>ママ</sup>フク、テレホウン）…明治18

朝野新聞

傳話料……………明治18 讀賣新聞

傳話器……………明治20 讀賣新聞、明治23 讀賣新聞

傳話線……………明治21 朝野新聞

傳話會社……………明治21 讀賣新聞

海底傳話機……………明治21 讀賣新聞

傳話交換……………明治23 讀賣新聞

京濱傳話用達會社……………明治29 讀賣新聞

・「電話」

電話機……………明治15 朝野新聞、明治16 東京日日新聞、明

治16 郵便報知新聞、明治16 東京日日新聞、

明治18 朝野新聞、明治18 東京日日新聞、明

治20 時事新報、明治21 東京日日新聞、明治

22 時事新報、明治23 時事新報、明治24 日

本

電話線……………明治16 讀賣新聞、明治18 讀賣新聞、明治20

讀賣新聞、明治21 讀賣新聞、明治21 讀賣新

聞

電話機……………明治17 讀賣新聞、明治18 讀賣新聞、明治19

讀賣新聞、明治20 讀賣新聞、明治21 讀賣新

聞

電話……………明治17 讀賣新聞、明治18 讀賣新聞、明治20

讀賣新聞、明治21 讀賣新聞、明治23 讀賣新

聞、明治29 讀賣新聞

高聲電話機……………明治18 讀賣新聞

電磁電話機（エレクトロ、マグ子チック、テレホウン）……………明治

18 讀賣新聞

電話會社……………明治18 讀賣新聞

軍用電話機……………明治18 東京日日新聞

自動電話機……………明治18 東京日日新聞

磁鐵電話機……………明治19 讀賣新聞

炭素電話機……………明治19 讀賣新聞

電話器……………明治20 讀賣新聞、明治21 讀賣新聞

電信電話……………明治20 讀賣新聞

海底電話機……………明治20 讀賣新聞

水底電話線……………明治20 讀賣新聞

電話機會社……………明治20 讀賣新聞

電話局……………明治21 讀賣新聞

電話交換局……………明治21 讀賣新聞

咽喉電話機……………明治22 讀賣新聞

水中電話機……明治22	讀賣新聞
電話……明治22	時事新報、明治24 國民新聞、明治33
國民新聞、明治34	讀賣新聞、明治41 國民新聞
電話線……明治22	時事新報、明治28 東京日日新聞、明治30
時事新報	
電話會社……明治22	時事新報
顯微電話機……明治23	時事新報
巾着形電話機……明治23	時事新報
水中無線電話……明治23	時事新報
電話公信……明治23	時事新報
劇場電話會社……明治24	官報
電話器……明治28	東京日日新聞
電話新聞……明治26	朝野新聞
電話柱……明治30	時事新報
電話中繼業……明治31	東京日日新聞
電話所……明治33	國民新聞
電話料……明治33	國民新聞
自働電話……明治33	日本、明治34 時事新報
自動電話器……明治33	時事新報
電信電話隊……明治39	東朝

電話高利貸……明治39 報知新聞

自働電話機……明治39 東朝

遠距離電話料……明治43 報知新聞

夜間電話……明治43 報知新聞

・その他

話し機械……明治11『讀賣新聞』

新聞雑誌に見られる「電話」の初出は、「電話機」（明治十五年十月七日『朝野新聞』）であるが、明治二十九年にも「傳話機」の用例があるほか、「電話」の出現以後も「傳話」、「傳話機」、「傳話器」などが度々出現し、しばらくの間、「電話」と「傳話」の両方が使われていたようである。また、明治十八年三月十三日の記事では、「高聲傳話機」と「電磁電話機（エレクトロ、マグ子チック、テレホン）」で「傳話」と「電話」を区別して用いているかと思えば、そうでもなく、同じ記事中に「高聲傳話機」と「高聲電話機」が混在している。

また、『讀賣新聞』明治二十九年十一月二十六日には、電話の不足を補う主旨で「京濱傳話用達會社」を設立との記事がある。「電話」という用語が定着した後も固有名詞として「傳話」が残っていた例である。

新聞雑誌の用例中、「でんしん」の場合は、「電信」が使われるようになった以後は、「傳信」はほとんど使われなくなったのに対して、「でんわ」は「電話」が登場した以後もしばらく「電話」と並行して「傳話」が使われていたことがわかる。

### (三) 公文書

太政官時代の公文書類の原義をまとめた「公文録」<sup>(15)</sup>によれば、明治十七年「伝話機架設遅刻照会の件」には「電話線」、明治十七年「電話線新設の件」には、「電話線」「電話」「電話器」とあり、明治十八年「伝話機設置の件」には「伝話機」、明治十八年「伝話線官設の請を許さざるの件」には「伝話線」「伝話器」「伝話」とあり、用語が定着する以前の混在の状況が窺える。

### (四) 文学作品

その他、明治の文学作品中に現れた「電話」「電話機」については、以下の例が見受けられた。『明治文学全集』筑摩書房

テレフォン（傳話機）……明治19「日本文章論」末松謙澄  
傳話機……明治21「綠蓑談」須藤南翠  
傳話機……明治22「女子参政蟬中樓」廣津柳浪  
電話……明治18「佳人の奇遇」東海散士

電話……明治29「福翁百話」福澤諭吉

文学作品においては、比較的後の時期まで「傳」の字が用いられているのは「でんしん」の場合と同様である。

### 三 「伝信」から「電信」へ、「伝話」から「電話」へ

「傳信・電信」「傳話・電話」の用例を調査して見て来た。

明治の漢語辞書『新編漢語辞林』<sup>(16)</sup>には、「傳信」は「タヨリヲツタヘル」、「電信」は「デンキデスルタヨリ」、「電話」は、「デンキデツタヘルハナシ」とある。読んで字の如しであるが、では、一体なぜ、こういった経緯で「傳信」から「電信」へ、「傳話」から「電話」へと変化したのだろうか。

### (一) 幕末期

日本に電信機がもたらされた幕末の記録を調べてみることにしよう。

石野瑛『亞墨理駕船渡來日記』<sup>(17)</sup>石川和輔（石川本）によれば、嘉永七年二月廿四日の条に、「天津關理符千里眼（雷電傳信機トモ書）試ミニ興行仕候ハ」とあり、獻貢品目録<sup>（亞墨理駕人貢獻品目録）</sup>全には、「雷電傳信機一副連銅線」<sup>（關名テレグラフノ傳連銅線ヲ此方ノ人手ニモチ余ノ人ト追々連手ス傳信機ヲマハスト雷火筒中ヨリ人手ニツツル）</sup>とある。また、この資料には「雷電傳信機連銅線の圖」及び「天津關理符

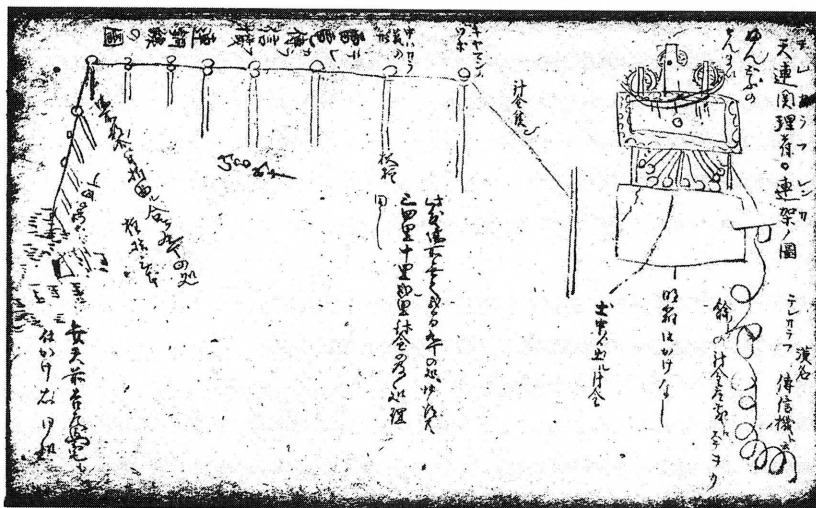


図1「雷電傳信機連銅線の圖」及び「天連閣理符連架ノ圖」(石野瑛『亞墨理駕船渡來日記』所載)

連架ノ圖」(図1)という図が掲載されており、図中右下には「テ

レカラフ 漢名傳信機ト云」との説明がある。

また、二月十五日米國使節獻上品及贈品目録として、「墨夷應接録通航一覽續輯」には「雷電傳信機一副、連銅線」、「高麗環雜記嘉永隨筆」には、以下のようにある。<sup>(18)</sup>

エレクトル、テレグラフ 一

但、雷電氣、ゑ事を告ル器械

「神奈川日記」<sup>(19)</sup> (『松葉樓叢書』)には、嘉永七年二月廿三日、亞墨理駕より献上品として、以下のようにある(図2)。

一 蒸氣車 一ツ  
一 雷電信機 一ツ 全  
メリケン名 ストンムワーゲン  
テレグラフ

(以下略)

更に、この「神奈川日記」には、ペルリ献上電信機の装置図が記載されており、図中上部の説明文には「漢名 雷電信機 仕掛之圖 メリケン名 テレグラフ」とある(図3)。これらの例から、日本に電信機が入って来た当初「テレグラフ」を意味することばとして「雷電傳信機」「雷電信機」「傳信機」という用語が用いられ、同

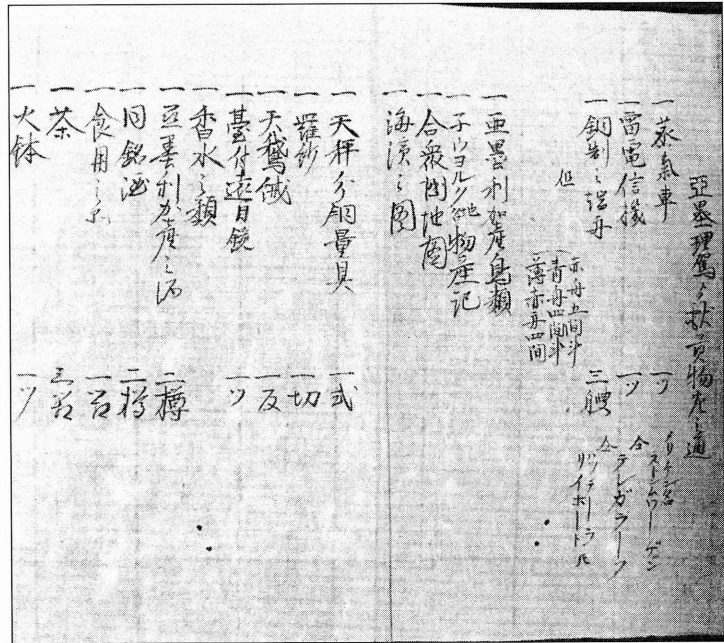


図2 「神奈川日記」『松葉楼叢書』（通信総合博物館所蔵）

## (二) 江戸時代

八耳俊文氏は、かつて術語「電気」の初出文献として『博物通

時」にこのことばは中国語からの借用によるものであったことがわかる。

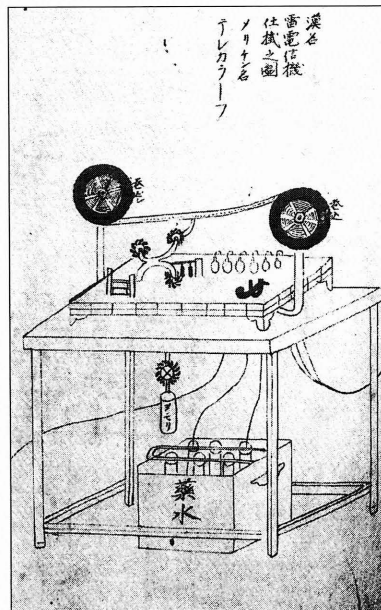
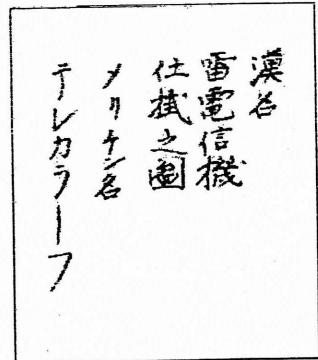


図3 「神奈川日記」『松葉楼叢書』（通信総合博物館所蔵）



書<sup>②①</sup>」を紹介した。氏は論文の中で、『博物通書』の第六章「電気通標」では、北京と広東間を伝信で結ぶ案や、アルファベットではなく漢字で伝える独特の試案についての記述があることに触れ、「電気通標」は、「電気を利用して標（記号）を通じる」、つまり「電気通信」のことを表していると言っている。「傳信機」「電信機」とい

う表記こそないものの、電信機についての記録として現在わかつている中で最も古い資料と言えるのではないだろうか。

明治期から江戸時代まで遡って、現存する資料を元に「電信機」について更に詳しく調べてみることにしよう。

幕末から明治初期の日本における自然科学入門書として知られている『博物新編』<sup>(22)</sup>（合信著、咸豐五年）には、電信局を設置してイギリスとフランスを電信で結ぶことについて記述して電気が信を伝える計を説明し、また、電気は天空の雷電と同じ性質であると言うのである。

# 此皆電気傳信之計也

（中略）

西人製電気之初尙未知與天空雷電同性

（『博物新編』、合信著、咸豐五年（一八五五））

『博物新編』の和訳本『博物新編譯解』<sup>(23)</sup>（大森惟中譯、明治七年）では、該当箇所を以下のように解説している。

西人電気ヲ作ルノ法アリ、ソノ理奇ニシテ用<sup>フシギ</sup>大イナリ、藉<sup>ハツラキ</sup>テ以テ音信ヲ傳通スモノアリ藉<sup>オモテ</sup>テ以テ瘋癲ヲ醫治スルモノアリ  
（中略）

然レドモ此レ皆玩<sup>モテアソビ</sup>栗<sup>タウク</sup>ノ具タリ、未ダ信息ヲ通傳スノ要ニシテ且ツ奇トスルニ若サルナリ、英吉利ノ京ハ佛蘭西ノ京ト遠サ千餘里ヲ隔テタリ、自ラ電気ヲ製造スルノ法アリテ、兩國ノ間問數刻ニシテ即チ通シ、談スルヲ觀面ノ如シ、ソノ計亦妙ナリ其法 英 京ニテ一ノ電氣局ヲ建テ佛 京モ亦一ノ電氣局ヲ建ツ、局中各一ノ電 機器ヲ設ケ、彼此鐵線ヲ以テ相傳へ、英國ヨリ連テ佛國ニ至ル、ソノ線陸ニ在ルトキハ火輪車ノ道ニ附ケ絲棉<sup>イトモシ</sup>等ノ物ヲ以テ之ヲ纏紮ケ百歩ゴトニ杆ヲ立テ、站ゴトニ塚ヲ設ケ以テ綜引ヲセ接グ、海ニ在ルトキハ此海凡ソ海底ニ縋沈メ、樹津ノ筒套ヲ製シテ之ヲ護ル、久シキヲ歷テ銹ス壞レズ、其機器ノ側ラニ鐘鈴ヲ設ケ以テ聲ヲ報セ、機器ノ上ニ羅輪ヲ設ケ以テ字ヲ報ス羅輪トハ木ヲ斲滑クシ、圓 板ヲツクリ二十六字母ヲ環列リ、西洋國ノ文字ハ獨リ二十六字母ヲ用キ、最切テ文ヲ成ス 中ニ圓 孔ヲ鑿リ、樞ヲ容レ、鍼ヲ銜マセ、時辰鐘錶ノ面ノ如クシ、

（中略）

此レ皆電気信ヲ傳ルノ計ナリ

（中略）

西人電気ヲ製スルノ初メ、尚未ダ天ノ空ノ雷電ト性ヲ同ウスルヲ知ラズ

（『博物新編譯解』、合信著、大森惟中譯、明治七年）

「雷電」は既に『博物通書』に見え、「第一章 引言」で「雷電之氣」と表現している。そして、「光と聲がある。光は既ち電、聲は即ち雷」であると説明するのである。

#### 雷電之氣磅礴乎宇宙萬物一氣流通

(中略)

要知天上雷電何自而發請言其故雲是有電氣在者假如一片雲有電氣增一片雲有電氣減兩片雲相近其電氣出彼入此有光與聲迸出光即是電聲即是雷

(『博物通書』、咸豐元年(一八五一))

明治初期に翻訳作業が行われ、明治六年(一八七三)から刊行が始まった英国の啓蒙書とも言える百科事典『百科全書』<sup>(24)</sup>「氣中現象學」「大氣ノ電氣」「雷電 北光」の節では、「大氣中電氣ノ現像ハ甚タ重切ナル件ナレト未タ十分明瞭ナラス(電氣篇ヲ參考スヘシ)」と記述し、「電氣及磁石」「電氣論」では、「埃歴ト電氣トノ性ノ同ジ」であると説明するのである。

琥珀ヲ摩擦シテ羽毛ノ如キ輕體ヲ觸レシムレバ或ハ吸引シ或ハ排却スル力ヲ生ズ昔ヨリ能ク知レル所ニシテ後世此力ヲ名ヅケテ埃歴ト云フ此希臘人ノ琥珀ヲ呼ビテ埃歴イレキトロン徳論ト稱スルニ出

ツルナリ

(中略)

然レト眞ノ電氣學ト稱スル者ハ其後年ヲ經テ起レリ千七百五十年ノ頃ニ及ヒテ數種ノ著キ實事ヲ考明セリ就中便慾憫弗蘭希林氏埃歴ト電氣トノ性ノ同ジキ所以ヲ知ル然レトモ千八百年代ニ至ルマデハ埃歴ト格物學ノ他ノ諸科ト多ク關係アルヲ查出セズ又之ヲ使用スルノ專要タルヲ知ラズ其後久シカラズシテ終ニ電氣學ト稱スルモノ起レリ

(『百科全書』、明治十七年)

また、江戸時代に翻訳作業が行われたフランスの日用百科辞典(原本はショメールが編纂した一七〇九年刊行の *Dictionnaire Oeconomique*)の蘭訳本の翻訳書である『厚生新編』<sup>(25)</sup>「雷」の項には、次のようにある。

雷は尋常從來の説に従へば、電に繼て鳴動声を発するものなり。是大氣雲中に火氣猛勢相逼り、互に相摩擦盪し、搏激衝動する所の音響なり。電と雷は其体同ふす。電先ッ其光を耀して而して雷これに繼ぐ。

(中略)

雷電の迅速なること甚ダ驚愕するに堪へたるは、「フラカリ



ン。〈人名〉の実験せる説に、一万式千尺の鉄線<sup>はつね</sup>を「エレキテリセ」の力を以て一「セコンド」の間に疾走す。其響動一千百尺のみ聞へたりと云ふ。これを以て知るに、雷の落ること其音響の聞ゆる前に十倍余も早し。  
(『厚生新編』、昭和十二年)

ここで注目すべきは、『博物通書』に既に記述のあった「雷電」は「電気」を意味しているという見解である。

つまり、「雷電傳信機」は「電気傳信機」を意味し、「電気」と「傳信機」は修飾関係にある。まず、「傳信機」であつて、どのような傳信機かと言えば、「電気(雷電)」による「傳信機」であるということである。

先に示した「テレカraf 漢名 傳信機ト云」(「天連關理符連架ノ圖」『亞墨理駕船渡來日記』石川本)、「天連關理符千里眼(雷電傳信機トモ書)」(『亞墨理駕船渡來日記』石川本)、「エレクトル、テレガラフ 但、雷電気、ゝ事<sup>コト</sup>を告ル器械」(「墨夷應接録通航一覽續輯」『高麗環雜記嘉永隨筆』)、「漢名 雷電信機 仕掛之圖 メリケン名 テレカraf」(「神奈川日記」『松葉樓叢書』)という表記から、「電信機」は、もともと「雷電傳信機」と表記されており、同時に、その意味は「エレクトル」つまり「電気」によるテレグラフであつたということが明確になった。

### (三)「テレグラフ」の語源

「エレクトル、テレグラフ」ということばの存在は、裏を返せば、それ以前に「エレクトル」ではない「テレグラフ」が存在していたことを物語る証拠である。つまり「電気」を使わない「傳信機」が存在していたということである。「電気を使わない傳信機」とは、一体どのようなものなのであろうか。表1で紹介した明治初期の辞書でも「Telegram」と「Telegraph」との間で、「電信」と「電報」の混交が見られ、表2では「電信」の説明に「電報」とあり、「電報」の説明に「電信なり」「電信に同じ」などの記述があり、「電信」と「電報」を明確に区別した説明がなく、認識が曖昧である。ここで改めて、原語の「Telegraph」について詳しく調べてみることにしよう。

“The Oxford English Dictionary (2<sup>nd</sup> ed.)”によれば、“Telegraph”は、第一義にて、「いろいろな符号を用いて離れたところにメッセー<sup>(26)</sup>ジを伝達するもの」であるとし、テレグラフという名前はフランスで一七九二年、Chappeによって発明されたものとして初めて現れ、それは、事前に決められた符号に従って様々な配置をする動作可能な腕を持つまっすぐな支柱から成るものであると説明している。更に、現在ではこの意味は希薄になり、“semaphore”または“signaling apparatus”と呼ばれているとしている。これは「腕木通信」のことに他ならない。

An apparatus for transmitting messages to a distance, usually by signs of some kind. Devices for this purpose have been in use from ancient times, but the name was first applied to that invented by Chappe in France in 1792, consisting of an upright post with movable arms, the signals being made by various positions of the arms according to a prearranged code. Hence applied to various other devices subsequently used, operating by movable disks, shutters, etc., flashed of light, movements in a column of liquid, sounds of bells, horns, etc., or other means. (Now rare in this sense, such contrivances being usually called *semaphores* or *signaling apparatus*.)

(“The Oxford English Dictionary (2<sup>nd</sup> ed.) ,” 1991)

第一義に、この「腕木通信」を掲げ、続く二義として “In full, *electric* (or *magnetic*) *telegraph*” (「電信」) を掲げ、この ②

また、初めは「タシグラフ」と名付けたが、Miot de Mérito「テレグラフ」の方が良い名前だとしたと説明している。

Miot de Mérito states in his *Mémoires* I. 38, that Chappe the inventor proposed to call his invention a *tachygraphe*, but was told by Miot that the name was bad, and ought to be *télégraphe*, which he at once adopted.

“Online Etymology Dictionary”<sup>(12)</sup> “Telegraph” “sema-  
phor apparatus”<sup>(13)</sup>

1794, “semaphor apparatus” (hence the *Telegraph Hill* in many cities), lit. “that which writes at a distance,” from Fr. *télégraphe*, from *télé-* “far” (from Gk. *tele-*) + *-graphe*. The signaling device had been invented in France in 1791 by the brothers Chappe, who had called it *tachygraphe*, lit. “that which writes fast,” but the better name was suggested to them by Fr. diplomat Comte André-François Miot de Mérito (1762-1841). First applied 1797 to an experimental electric telegraph (designed by Dr. Don Francisco Salva at Barcelona); the practical version was developed 1830s by Samuel Morse. The verb is attested from 1805; fig. meaning “to signal one’s inten-

tions" is first attested 1925, originally in boxing.

("Online Etymology Dictionary," 2001)

"Telegraph"は"semaphor apparatus"のフランス語の"télégraphe"から来ており、元々の意味は、"télé-" "far" (from Gk. *tele-*) + "-graphie"とあるとある。Chappeによって発明されたことや、「タシグラフ」から「テレグラフ」への呼び名の異動の経緯については"The Oxford English Dictionary (2<sup>nd</sup> ed.)"と同様に説明し、そして、一七九七年に始めて実験的な"electric telegraph" (電信機) が現れ、一八三〇年代に実用的なバージョンが開発されたと説明している。

これらの辞書の説明から、「Telegraph」は元々「腕木通信」を意味することばであったと解釈できる。そして、「Telegraph」はその後「Electric Telegraph」として、現在の「電信機」を示す意味のことばとなったということである。このあたりの経緯については、中野明氏の『腕木通信<sup>(28)</sup>』を参照されたい。

「電気を使わない傳信機(腕木通信)」がまず最初にあり、次に「電気」による「傳信機」を意味する「雷電傳信機」が生まれ、「雷電傳信機」は「電信機」となった。先に論考したように、「高麗環雜誌嘉永隨筆」に「エレクトル、テレグラフ 但、雷電気、ゐ事を告ル器械」という表記があったことを考えても、そのことばの中

に「電気」の意味を込める必要がどうしてもあったことに疑う余地は無い。

「現在は、只電信、電報とのみ呼べども、明治初年の官令等はすべて傳信局、傳信機、傳信機繼立所などと言へり。こは、前記米國献上品目録の雷電傳信機より出て、雷電を省きたれば、エレキの意を含まざる名稱となりしならんか。」と『明治事物起原』で指摘している石井研堂は、そのことにいち早く気づいていたのであろう。

『博物通書』にある通り「光即是電、聲即是雷」であり、「電気」は、「雷電之氣」であった。この当時、「電気」を意味することばとして、専ら「雷電」が使われた。そのため、「エレクトル、テレグラフ (電気を用いた傳信機)」を意味する言葉として「雷電傳信機」が用いられたのである。

#### (四)「電話」ということばの成り立ち

このように考えるならば、「電話」についても、同様の語構成で解釈できるのではないだろうか。

荒川清秀氏は、「電話」は「電気通話」「電気伝話」等の略称として生まれたと考える。<sup>(29)</sup>と述べているので、目下調査中であるが、管見では「電気通話」「電気伝話」という用例は未だ見出せずにいる。一方、日本に電話が導入された当初の記録には、「傳話電信」(『讀賣新聞』明治十一年)、「傳話電信機」(『讀賣新聞』明治十一年)、

「傳話電信器」(「讀賣新聞」明治十一年)という用例が見受けられる。

「電信機」が「雷電」+「傳信機」であったのと同様に、「電話」についても「傳話」+「電信機」という語構成で解釈できないだろうか。その意味するところは、「話を伝える電信機」である。このように解釈すると、「話し機械」(「讀賣新聞」明治十一年)「話の通ずる電信機」(「朝野新聞」明治十九年)、傳話機(「綠叢談」須藤南翠明治二十一年)という表現が納得のいくもつともな表現であると感じられてくる。

「電話」ということばの意味するところは、まぎれもなく「話を伝えることのできる機械」であり、「電話」は、「電気」による「伝話」なのである。

当初、「電話」は「傳話電信機」と言われたが、その後、省略形として「傳話」が用いられるようになった。そして、「電信機」のときと同様に「電気」の意味を込めたかったという気持ちから「傳」の字に代えて「電」の字を宛てて「電話」としたのではないだろうか。

「携帯電話」が「携帯」「ケータイ」と、省略して使われるように、語彙の一部が脱落する例はある。その字面からは十分に対象物の意味を想起し難いような表現であっても省略形としてのことばが使われる例は存在するのである。

荒川氏の指摘にもあるとおり、「触感」から「食感」へ、<sup>(30)</sup>「滑舌」

から「活舌」<sup>(31)</sup>へなど、本来の漢語表記に代わって同音異義の別の漢字を宛てる例は現代においても存在するが、こういった漢字の多様な宛字は、もつと古い時代から行われていた。殊に怒濤の如く入ってくる外来の文化や概念をいち早く吸収しようとした明治初期は、外来語の漢字表記多様化が行われた。「盲録」(「毫六」)、「怠屈」(「退屈」)、「生帳面」(「几帳面」)など、本来の字とはかけ離れてしまった意味にふさわしい漢字、場面の表現に的確な意味の漢字にすることが要因となって、元々の漢語本来の表記と違う、ことばの意味によりふさわしい漢字を宛てようとする工夫が多く行われたのである。<sup>(32)</sup>

「電話」ということばは、漢語の「動詞」+「目的語」という構造それだけでは単語として働くことは難しいとする荒川氏の説明はもつともで、「電話」という用語は、はじめからこの語構成であった訳ではない。図4に示す通り、「電信機」は「雷電傳信機」から派生し、「電話」は「傳話電信機」から派生したものであり、その変遷は、語彙の一部が脱落し、更に同音の文字の交換という過程を経て、現在の「電信」「電話」という語彙が成立したものと考える。

このように考えると、先に揚げた明治の漢語辞書『新編漢語辞林』にあった、「傳信」は「タヨリヲツタヘル」、「電信」は「デンキデスルタヨリ」、「電話」は、「デンキデツタヘルハナシ」という記述、すべてに納得のゆく説明がつく。

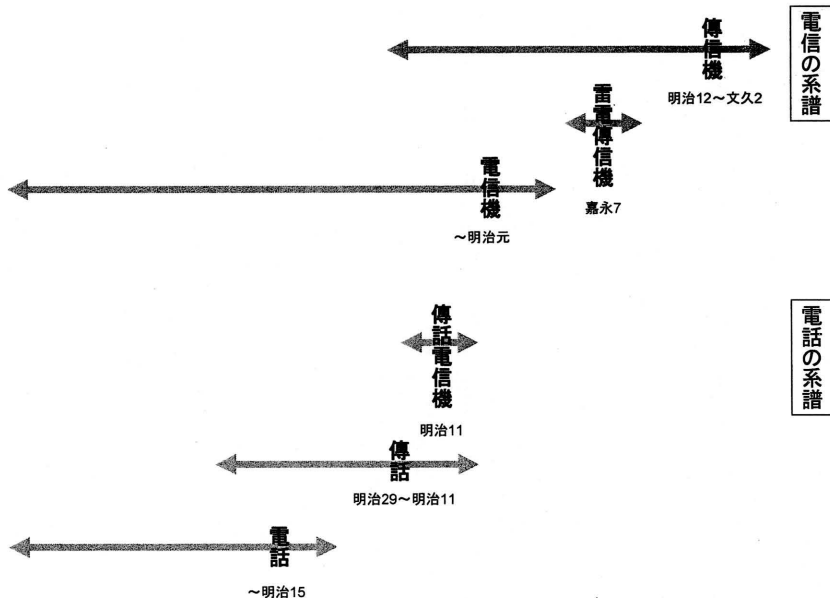


図4「電信」及び「電話」の系譜

#### 四「電気」に対する恐怖と期待

「電信機」が日本に導入された当初、「電信機」は「切支丹伴天連の魔法」と恐れられ、処女を強奪し、その生血を取ってこれを架線に塗る（『新聞雑誌』第四十一號、明治五年四月）など様々な奇談も生まれ、そのため架設に際しての妨害もあつたという。

また、明治二年には『天理可楽怖』という名前の雑誌が発行され、会津白虎隊戦士の報などを掲載した。「天理可楽怖」という文字には、電気を切支丹伴天連の魔法使用と言っていた時代の思い、恐怖の対象としての電信のイメージ、楽という字を宛てながらも同時に怖るべき存在として捉えていた当時の意識をそこに見ることが出来る。

近代の新技术である「電気」の力を使った新しい技術に対する恐怖と期待の感覚は、「電話」導入の時にも同様で、電話から火事が起きるのではないか、あるいは、電話でコレラが伝染するのではないか、といった電話に対する恐怖心を当時の人々は抱いていた。

議事堂焼失以来電気燈は勿論總ての電気作用物に對し恐れを抱くもの甚だ多く、或る電話加盟者は専門の技師に就て「電話は非常に英敏にして能く音聲を傳ふるものなるが、若し加盟者の中に虎列刺病等ありし場合には其の病毒を各加盟者に傳ふる

ことなきや」と質問し、又或る者は「電話から火は發しませんか」と質問するほどに至りしと。

〔郵便報知新聞〕、明治二十四年二月三日〕

「伝信機」から「電信機」への変更について、工部省に電信寮が置かれる以前から、「電信」という表現が使われていたことは既に述べたとおりである。

「ことば」は、私たちが日常生活を行う上での規範である。勿論、政府がトップダウンで政策的に使用するようになる用語や、ある一定の世界の中でのみ用いられる学術専門用語というものもあるだろう。しかし、ことばというものは、基本は社会的便宜的な約束ごとであり、社会の共有財産である。社会一般の賛同が得られなければ、いかに上から規制をかけたとしても、自然淘汰されるものである。とすれば、「伝信」から「電信」へ、「伝話」から「電話」への変更は、一般市民の「電気」に対する不安と期待の交錯した猛烈な欲求が生んだものだったのではないだろうか。

浮田和民は、「物質的文明の上にて第二十世紀を「電気」の世紀」といふならば社會問題の一面より見て第二十世紀は「婦人の世紀」であるといふことが出来るであらう。<sup>33</sup>」<sup>33</sup>と言っており、当時の認識としても「電気」に対する特別な思い入れがあったことは明らかである。

「文化竈」「文化鍋」「文化包丁」「文化住宅」と「文化云々」という用語が、その後、大正時代に流行ったように、「電気焔炉」「電気暖房」「電気蓄音機」「電気治療」「電気鉄道」と、「電気云々」が流行語であった。小林秀雄や三浦哲郎の作品に登場する神谷バーの「電気ブラン」はその典型とも言えるだろう。「電気杖」なる、冗談のような商品も登場したようである。当時の人々にとって、それ程「電気」に対する思いは強かったのである。

電気の学問が追々開け種々の新發明のあるが中に、近來最も珍しき發明は電気杖と唱ふるものにて、是は一寸見た處は通常の杖の所々に水晶の節のあるものなるがこの水晶の節の中に極小さな電気燈を仕掛け置き、而して上着の隠しか帯の間へ挿み置く程の小さな電気溜より、其杖へ線金を付けて電氣を導く時は、杖の節より光りを放ちて極明るく道を照らし、凡そ一時間程は保ち甚だ便利の提灯にて、價も殊の外廉なりと云ふ。また同じ工夫にて襟飾の釦子を輝かし、金剛石の代用を爲す等の事に流行すれども、これ等は電気杖の利用には遠く及ばぬものなりと。

〔讀賣新聞〕、明治十七年四月一日〕

「電信」「電話」の前の通信手段には、「狼煙」「腕木通信」や「手紙」などがある。「狼煙」や「腕木通信」は、ある限られた情報を

抽象化した符号として伝達し、「手紙」は情報を書きことばで伝達した。符号化という作業を介さずに、直接面談して話をするのと同じように、書きことばではなく話しことばで情報を伝達することは、「電信」の登場によって始めて成し得たことである。物集高見が「日本文章論」<sup>(34)</sup>の中で「また、電信文といふものがあります。これハ、全く言文一致で、話しのやうに書くものであります。」と指摘しているとおりである。

「通信」とは、時間と空間を隔てて情報を伝達し合うことである。「電信」は電気の力を用いることによって「通信」の「即時性」を獲得した。そして更に「電話」は、肉声で、生の声をそのまま伝えたということにおいて、それまでの通信手段と比較して画期的な通信方式であったと言つて良いのではないだろうか。

## 五 明治期のことばに関する運動

明治初期は、「かなのくわい」や「羅馬字会」が発足し、漢字廃止や言文一致など、ことばに関する様々な議論が行われた時代である。日本の国語国字に関する運動は、慶応二年に、一円切手の肖像で知られ、日本の郵便制度の創始者である前島密（本名は來輔）が、「漢字御廢止之議」<sup>(35)</sup>の建白書を将軍慶喜に差し出したことに始まる。前島密は、「漢字御廢止之議」にて、「實に少年の時間こそ事物の道

理を講明するの最好時節なるに此形象文字の無益の古學の爲めに之を費し其精神知識を頓挫せしむる事返す／＼も悲痛の至に奉存候」と漢字の弊害を訴え、「御國に於ても西洋諸國の如く音符字（假名字）を用ひて教育を布かれ漢字は用ひられず終には日常公私の文に漢字の用を御廢止相成候様に奉存候」と漢字を廃し、国字としてかなを採用することを提唱した。

森有禮は英語採用論、西周や矢田部良吉はローマ字国字論を提唱し、また、全文仮名書の化学書『ものわりのはしご』（明治七年四月）を著し、後に「かなしんぶん」（明治十八年七月創刊）を主宰した清水卯三郎は、明治七年五月『明六雜誌』に発表した「平假名ノ説」<sup>(36)</sup>で、英語国語論を批判してローマ字に反対し、漢字の難しいことを指摘して平仮名を用いることを主張した。

明治初期には、ローマ字で日本の言語を書こうとする説、仮名をもつて漢字に代えようとする説、漢字削減説など、前島密以来、多くの啓蒙家たちによつてさまざまな文字改良論が提唱された。

しかし、漢字漢語を全く否定する意見ばかりではなく、福澤諭吉は、明治六年八月『文字之教』<sup>(37)</sup>にて、「ムツカシキ漢字ヲバ成ル丈用ヒザルヤウ心掛ケルコトナリ。」として、漢字を全く廃するのではなく漢字を制限する立場を取った。

また、矢野文雄のように、漢字かな交じり文の優れていることを示唆する意見もあった。<sup>(38)</sup>

學ヒ難キ漢字ヲ棄テ、之ヲ全廢シ假名文ノミヲ用ヒント云フハ其ノ便利大ナルカ故ニ此論一タヒ出テナバ世間ハ忽チ其方ニ傾キ直ニ漢字ヲ廢スルナラント思ハル、ニ能ク、實際ヲ察スレバ左ハ無クテ世人常ニ假名文ヲ不便ノ如ク思ヒ成ルヘク之ヲ避ケント勉ムルノ有様アルハ何故ソヤ斯ク實際ト理窟ト大ニ反對スルカ如ク見ユレトモ必竟ハ理窟ヲシク見ユル論ニ尚ホ理窟ノ足ラザル所アリテ理窟ナキガ如ク見ユル實際ノ方ニ大ナル理窟アルガ故ナリ

〔『日本文體文字新論』第三章「日本ニ用フ可キ文字及文體ノ事」明治十九年〕

更に、辻新次は、明治三十五年『言文一致論集』<sup>(39)</sup>の「序」において、「中には言文一致といふと丸で漢字や文語を排斥するかの様に思つてをる人がある。併し吾輩の主張する言文一致の趣意では、國民に一番廣く通用し且つ國民が日常使つてをる言葉でさへあれば、漢語でも梵語でも英佛獨語でも雅語でも俗語でも毛嫌ひなしに之を同化し、融和して我國語を富まさうとするのである。つまり現在活きて働いて居る言葉を改良し其の發達を計るのである。」と説き、漢字漢語の使用を積極的に進める意見もあつた。

また、実践として言文一致小説『浮雲』を書いた二葉亭四迷は、漢字については基本的に廃止を主張する立場を取るものの、漢語に對しては必ずしも否定的ではなかつた。<sup>(40)</sup>

國民語の資格を得てゐない漢語は使はない、例へば、行儀作法といふ語は、もとは漢語であつたらうが、今は日本語だ、これはいゝ。併し舉止閑雅といふ語は、まだ日本語の洗禮を受けてゐないから、これはいけない。磊落といふ語も、さつぱりしたと云ふ意味ならば、日本語だが、石が轉つてゐるといふ意味ならば日本語ではない。日本語にならぬ漢語は、すべて使はないといふのが自分の規則であつた。日本語でも、侍的のものは已に一生涯の役目を終つたものであるから使はない。どこまでも今の言葉を使つて、自然の發達に任せ、やがて花の咲き、實の結ぶのを待つとする。

〔余が言文一致の由來』<sup>(41)</sup>、明治三十九年〕

末松謙澄も、基本的には和漢混合の書き方を改めてローマ字あるいは仮名文字など一定の綴り字に限定しようと主張する立場であつたが、外国語であつても學術上の熟語など採用すべきものは採用し、時には端的に古語を駆使するべきであると「日本文章論」<sup>(42)</sup>の中で説いている。



外國語と雖ども、學術上の熟語など、採るべきハ、之を採り、巧に自國の語となし、新發明物の名稱も、希臘羅馬の熟語なき者にてても、今日流通の國語にてハ、冗長に過ぎ、且つ他に混雜し易き時ハ、巧に古語を採用して、名を命すること、「テレグラフ」ハ希臘語の「遠書」の二語より合制し、「テレフォン」(傳話機)ハ、「遠音」の二語より合制し、「マイクロスコープ」(顯微鏡)ハ、「細覽」の二語より合制せる類、少なからず、採用の方法さへ、其の宜を得れハ、外國語を採るに於て、何の忌むべきなし

(『日本文章論』、明治十九年)

「テレグラフ」は「遠書」、「テレフォン」は「遠音」という、ある意味語源に忠実な末松の提案は残念ながら人口に膾炙されることなく、一般には「電信」「電話」が定着したが、「遠書」「遠音」という提案は、表1に示したように、あらかわそおべえの『外来語辞典』にも、「電信」は「遠くで書くものの義」、「電話」は「遠くの音の義」といった説明に継承されて行くのである。

時代は下り、高橋龍雄は、昭和九年『國語學原論』<sup>43)</sup>の「序」において、「國語は和語のみにあらず、日本人の漢語はこれ國語なり。」と言ひ、漢字漢語がいかに日本語の中に深く浸透しているかを次のように説明するのである。

「日本ことばの會」で「電氣」といふ漢語の代りに、和語を案出して見たが、どうしても妙案がないので、「エレキ」といふ洋語を採用することにした。そこで電燈は「エレキあかり」電信電報は「エレキだより」電文は「エレキぶみ」電話は「エレキばなし」など拵へて見たが、いかにも間が抜けて馬鹿／＼しいから、會員自身さへをかしくなつて使はなくなつた。まして充電、放電、送電、蓄電、感電、停電などの言葉は自由に民衆が造つて行くのに、「日本ことばの會」では、唯呆然としてゐるより仕方のない事であつた。

(『國語學原論』、昭和九年)

前島密以来、明治初期の啓蒙家らは言文一致を理想とし、漢字漢語排斥を推奨する運動が盛んであつたにも拘らず、江戸時代から続く漢字の素養を基礎とする、政治や教育の世界における当時の知識人によつて、あらゆる方面で漢語の造語が行われた。そして、これらの漢語が私達の言語生活に定着して行つたのである。

こうしたことばに関する様々な議論や運動を通して、漢文直訳体から言文一致、口語文へと成長し発展して行くわけであるが、明治という時代は、漢語や漢文が権威ある表現として捉えられた漢字謳歌の時代であつた。西周の哲学用語にも見られるように、「西歐語の訳語は、新造の漢語や中国語の借用、さらに新しい意味を付与さ

れた漢語が用いられ<sup>(4)</sup>たのであるが、初期の段階では、「宗教」を「法教」、「哲学」を「奇哲学」「窮理学」「奇賢学」「理学」ということもあり、訳語の形成において、現代語彙成立までの過渡的な段階として、これらの用語は流動的であった。こうした試行錯誤の段階を経て、外来の事物や概念を表現するための多くの和製漢語が新たに造語され、定着して行ったのである。

「電気」「電信」という漢語は、中国語からの借用語が日本語として根付いたのに対して、「電話」については、中国語の「徳律風」「得力風」「得利風」などの熟語が日本に根付かなかった理由は、一つには、明治という時代は漢字愛好の時代であり、外来の文化をいち早く取り入れて、中国語からの借用としての漢語とは別の独自の表現としての日本語をつくって行こうとした背景と、いま一つには、不思議な魔力を持つ技術としての不安と期待の対象であった「電気」に対する熱烈な吸引力が働き、どうしても「電」の字を使いたかったという意思が働いたためと考えられる。この二つの理由から、「電話」という和製漢語がつくられ、定着したのであらうと考える。

#### むすび

「電信」と「電話」という通信に関することばを通して日本の通信文化について論考した。第一章、第二章では、「電信」及び「電話」について調査した結果を示し、第三章では、「伝信」から「電信」

へ、「伝話」から「電話」への変遷の過程を明らかにし、第四章では、近代の科学技術「電気」の受容と、通信文化史上における「電信」「電話」の意義について考察し、第五章で、明治期のことばに関する運動と「電信」「電話」の関わりについて論考した。

日本の近代化の過程において、外来の新しい技術や概念を表現するために多くの漢語が用いられた。しかし、必ずしもそれらの漢語のすべてが中国語からの借用によるものだったわけではなく、明治初期には多くの和製漢語がつくられ、日本独自のことばで表現することによって、外来の新技術を自分のものとして理解し、日本人の意識の中に深く取り込んで行ったのである。

科学史や洋学研究の分野において、医学や物理学に関してはこれまでも数多くの研究成果があるが、「通信」に関する研究は数少ない。今後は、文化的な視点からの「通信」についての研究が望まれる。

#### 〈付記〉

本報告執筆にあたり、資料閲覧及び複写を許可くださった通信総合博物館及び国立公文書館に感謝したい。

荒川清秀氏と八耳俊文氏には、貴重なご意見ならびに論文等関連資料を頂戴し、感謝に堪えません。

注

- (1) 福澤諭吉「民情一新」『明治文學全集』第八卷、筑摩書房、一九六六年
- (2) 『西征紀行・幕末の日露外交』箕作阮甫〔著〕、木村岩治編、津山洋学資料館友の会、平成三年
- (3) 『改訂増補明治事物起原』、石井研堂、春陽堂、昭和十九年
- (4) 『遠西奇器述』川本幸民口述、嘉永七年〔一八五四〕一安政六年〔一八五九〕
- (5) 『明治のことば辞典』惣郷正明、飛田良文編、東京堂出版、一九九八年
- (6) 『日本国語大辞典』第二版、日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編、二〇〇〇年十二月―二〇〇二年十二月
- (7) 『大漢和辞典』修訂第二版 諸橋轍次編、大修館書店、一九八九年
- (8) 『新聞集成明治編年史』中山泰昌編著、中山八郎監修、本邦書籍、昭和五十七年
- (9) 『太政類典』第一編 百三卷（国立公文書館所蔵）
- (10) 『外務類纂』『郵政百年史資料』第二卷、郵政省編、吉川弘文館、一九七〇年
- (11) 『明治文學全集』筑摩書房、一九六五年二月―一九八九年二月
- (12) 『漢語外来詞詞典』刘正琰〔ほか〕編、上海辞书出版社、一九八四年、八二頁
- (13) 荒川清秀「電」のつくことば―「電話」を中心に―「2006ソウル高麗大学国際シンポジウム 漢字訳語と漢字文化圏諸言語の近代

語彙の形成」（漢字文化圏近代語研究会、二〇〇六年三月一八日、ソウル）

- (14) 『讀賣新聞』[CD-ROM版]、読売新聞社メディア企画局データベース部、一九九九年―二〇〇二年
- (15) 『公文録』『郵政百年史資料』第二卷、郵政省編、吉川弘文館、一九七〇年
- (16) 『新編漢語辞林』明治三十七年（『明治期漢語辞書大系』、大空社）
- (17) 『亞墨理駕船渡來日記』石川和輔（石川本）、石野瑛編纂、武相考古会、昭和四年
- (18) 『大日本古文書』（『幕末外国関係文書之五』、東京大学資料編纂所、昭和五十九年）
- (19) 『神奈川日記』『松葉樓叢書』（通信総合博物館所蔵）
- (20) 『博物通信』瑪高温著、咸豐元年（一八五二）
- (21) 八耳俊文「漢訳西学書『博物通書』と「電気」の定着」、『青山學院女子短期大學紀要』第四十六輯、一九九二年、一〇九―一三二頁
- (22) 『博物新編』合信著、咸豐五年（一八五五）
- (23) 『博物新編譯解』増訂再刻 合信著、大森惟中譯、青山堂、明治七年（一八七四）
- (24) 『百科全書』、丸善、昭和六〇年（明治十七年版の復刻）
- (25) 『江戸時代西洋百科事典『厚生新編』の研究』杉本つとむ編著、雄山閣出版、一九九八年
- (26) "The Oxford English Dictionary 2nd ed." Clarendon

Press, 1989

- (27) "Online Etymology Dictionary," Douglas Harper, November 2001, <http://www.etymonline.com/>
- (28) 中野明『腕木通信』朝日新聞社、二〇〇三年
- (29) 前掲、荒川氏論文（注13）
- (30) 橋本行洋「食感」の語誌 新語の定着とその要因』『日本語の研究』第二巻四号、二〇〇六年一〇月、九二—一〇七頁
- (31) 橋本行洋「カツゼツ（滑舌・活舌）の語誌 近代の漢語受容と辞書』『國語と國文学』平成十七年十二月、五〇—六五頁
- (32) 遠藤好英「近代文学と漢字」『漢字講座』第九卷、明治書院、昭和六十三年
- (33) 「百年前の世界と百年後の世界 第二、婦人問題」浮田和民篇『太陽』明治四十五年一月
- (34) 物集高見「日本文章論」『皇典講究所講演』十二、明治二十二年
- (35) 前島密「漢字御廢止之議」慶応二年（國語國字教育史料總覽）國語教育研究會編、國語教育研究會、昭和四十四年
- (36) 清水卯三郎「平假名ノ教」明治七年五月（前掲書）
- (37) 福澤諭吉「文字之教」明治六年八月（前掲書）
- (38) 矢野文雄『日本文體文字新論』第三章「日本ニ用フ可キ文字及文體ノ事」明治十九年（前掲書）
- (39) 辻新次『言文一致論集』明治三十五年（前掲書）
- (40) 半沢幹一「二葉亭四迷の漢字——『浮雲』における字法——」『漢字講座』第九卷、明治書院、昭和六十三年
- (41) 二葉亭四迷「余が言文一致の由來」明治三十九年（『明治文學全集』第一七卷、筑摩書房、昭和四十六年）
- (42) 末松謙澄「日本文章論」明治十九年（『明治文學全集』第七九卷、筑摩書房、昭和五十年）
- (43) 高橋龍雄『國語學原論』中文館書店、昭和九年、一五四頁
- (44) 「訳語」『日本語学研究事典』飛田良文「ほか」編、明治書院、二〇〇七年、一五四頁